

ichonamiki

No. 73

聖域なき改革

地域に根ざし世界に輝く大学へ

特集
Special Section

- 岡山大学から世界へ、グローバルに活躍する卒業生
吉岡 桂子さん 朝日新聞社 編集委員
- 研究室訪問 中村 栄三 最先端の分析技術で謎を解明
地球物質科学研究センター長
- きらり岡大生 Petra Pribičević (ペトラ・プリビチェビッチ)
スチューデント・ティーチャー／文学部特別聴講学生
- News & Topics 大学の動き／研究・臨床成果
- 編集後記
- 「最古の絵馬」にあやかろう！



改修された「中央図書館」

特集

Special Section

聖域なき改革

地域に根ざし世界に輝く大学へ

創造的国際学都を目指して——

森田潔学長の2期目がスタートを切った。

「教育再生」が国の重要課題の1つとして掲げられ、大学に機能強化やスピード感ある変革が求められる中、岡山大学は従来に固執しない不断の改革を進めていく。国際競争力を備えた日本の牽引大学としての岡山大学へ。断固たる決意を胸に、森田学長の新たな挑戦が始まる。

地域に開かれた美しいキャンパスを目指し、垣根を撤去した東西道路周辺。明るく開放的な雰囲気となり、多くの学生が行き交う。

ガバナンス改革Ⅱ（イコール）学長のリーダーシップとは思っていない。学長のリーダーシップはもちろん、大学が大学たる存在感を示すためにはそれぞれの部局も重要。部局が執行部によって左右されれば大きな失敗を招くわけで、各部局のアイデンティティを犯すようなことがあってはならない。組織機能を発揮するためににはミドルアップ・ミドルダウン（部局長主導型運営）を強化することも非常に大事だが、各部局長は部局の利益

兼ねることはよくある話で、岡山大学もそうであったが、大学改革の加速度を上げるためにも改革担当専任の理事を配置した。これは学外に対しても大きなインパクトを与えたのではなからうか。
今年度は岡山大学の今後を左右するであろう文部科学省の新規事業「スーパーグローバル大学創成支援」の募集がある。何としても支援対象30大学に選ばれたいところで、ただ、岡山大学はグローバル化が遅れており、そのために昨秋、プロジェクトを立ち上げた。そのチームリーダーで、当時工学部長だった谷口秀夫氏に大学改革担当理事を依頼した。大学改革はすでに加速するエネルギーを蓄えており、教職員の意識も変わりつつある。

代表ではなく、大学組織の執行部の1人という意識に立っていただきたい。その中でこそ学長のリーダーシップが発揮できると考えている。
また、各部局長の選考方法も見直し、適切な「人財」を集約し、不適切な場合はきちんと罷免できるシステムも確立しなければならぬ。各部局長の任期も学長の任期と連動させることができればと思っている。学長と各部局長とが一体にならなければ大学の徹底した改革は進まないだろう。

聖域なき改革の先に目指す理想の大学像とはどのようなものか。

1期目でも掲げていた、国際的な研究・教育拠点として大学と都市・地域が連繋した美しい学都を創造する「学都構想」の夢はまだ諦めていない。岡山の地をアメリカ・ピッツバーグのような医療都市、フランス・ストラスブールのような大学都市にしたいと考えている。

大学は企業と違い、教育は常に継続し、継続の中で改革を進めていかなければならない。さらにスピードも求められ、いっそう困難を極める。文部科学省の「研究大学強化促進事業」、厚生労働省の「臨床研究中核病院」の両方に選ばれているのは国立大学では旧帝大と岡山大学だけであり、これを強みとしながら創造力、国際力を身に付け、地域の方々を尊敬し、自慢に思う岡山大学を目指したい。

― 今期3年間に對する意気込みは。 ―
1期目では大学運営の方向性を示した「森田ビジョン」を掲げ、ある程度の成果は出せ、岡山大学の雰囲気は多少なりとも変えることができたと思っているが、私自身が描いていたスピード感が出し切れず、相反する思いもある。2期目において最初は森田ビジョンを進めることが私の仕事だと思っていたが、社会は大学に対して私が考えていた以上に速いスピードで変革を求めており、森田ビジョンではすでに古いと感じた。大学の存在自体が問われている中で岡山大学が生き残っていくためにはスピード感ある改革が必要。聖域なき大学改革こそ、2期目のなすべき大きな課題だと思っている。

― 2期目の執行部体制として新たに大学改革担当理事を置いた。国立大学の改革を先導する試みというが、その経緯とは。 ―
2期目に際して理事の任期も一度は満了するが、同一の役割に再任することは可能であり、なすべき課題をやり遂げるためには1期目で一緒にやってきた理事らを交代させるといふ思いはなかった。国立大学法人法によれば理事を7人採用できるのだが、岡山大学は6人しかおらず、理事をもう1人加えることで学内に新しい風を吹かせられるのではないかと考えた。大学では企画・総務担当理事が大学改革担当を

新たな挑戦

学長に聞く。

大学改革にかける思い

岡山大学の学長として2期目の任期を迎えた森田潔学長。揺るぎのない存在感ある大学を構築すべく、いかなる改革を進めていくのか。今期にかける意気込みやこれからの展望を聞いた。



新理事紹介



大学改革担当理事・副学長 谷口 秀夫

2014年4月1日付けで、谷口秀夫氏（前岡山大学工学部長、大学院自然科学研究科教授）が大学改革担当理事・副学長に就任した。

「変革を進めるためには組織バランスも重要。同じ部局から意見を出してもらえばかりでは暴走になるわけで、部局はもちろん意見が異なる教職員らが集まって議論を重ねることで改革の方向性を見いだしたい。さらに経営や教育、研究など大学内部の情報収集や分析、戦略計画の策定、情報発信といったIRも強化していきたい」と語る。

谷口 秀夫 ● たにぐち・ひでお
専門は情報工学。九州大学大学院工学研究科修士課程修了。日本電信電話公社、NTT データ通信株式会社、九州大学工学部助教授、同大学院システム情報科学研究科助教授、岡山大学大学院自然科学研究科教授、同工学部長などを歴任。熊本市出身。

組織に横串を通す

改革を

— 大学改革担当理事として着任し、岡山大学の現状をどのように感じているか。

学生自身の意識はもちろん、学生を送り出す先の社会がずいぶんと変わっており、それに向けて岡山大学も全学的に変えていかねばならないと思っている。森田学長からも岡山大学のグローバル化が遅れているという話があったが、理事着任前に各部署長と1対1で意見交換したところ、各部署はそれぞれ頑張っている。また、実践型社会連携教育においても同様だ。にもかかわらず大学全体として見たときにその取り組みや成果が分かっていく、学外から見ても何をやっているのか分からないのが現状。旧帝大クラスに比べて部署が小さいためか、やっている規模も小さく見えてしまう。教員が個人で閉鎖的に行っているケースもあり、一部で活性化していてもその教員がいなくなれば終了してしまう。それを継続的に

谷口理事に聞く一。

聖域なき大学改革の日常化を図るため、岡山大学は4月1日、新たに大学改革担当理事を置き、大学改革推進室のセクションを設けた。どのような改革戦略を描いているのか。谷口秀夫・大学改革担当理事に岡山大学の現状や今後の展開について聞いた。

— 具体的にどのように改革を進めるのか。

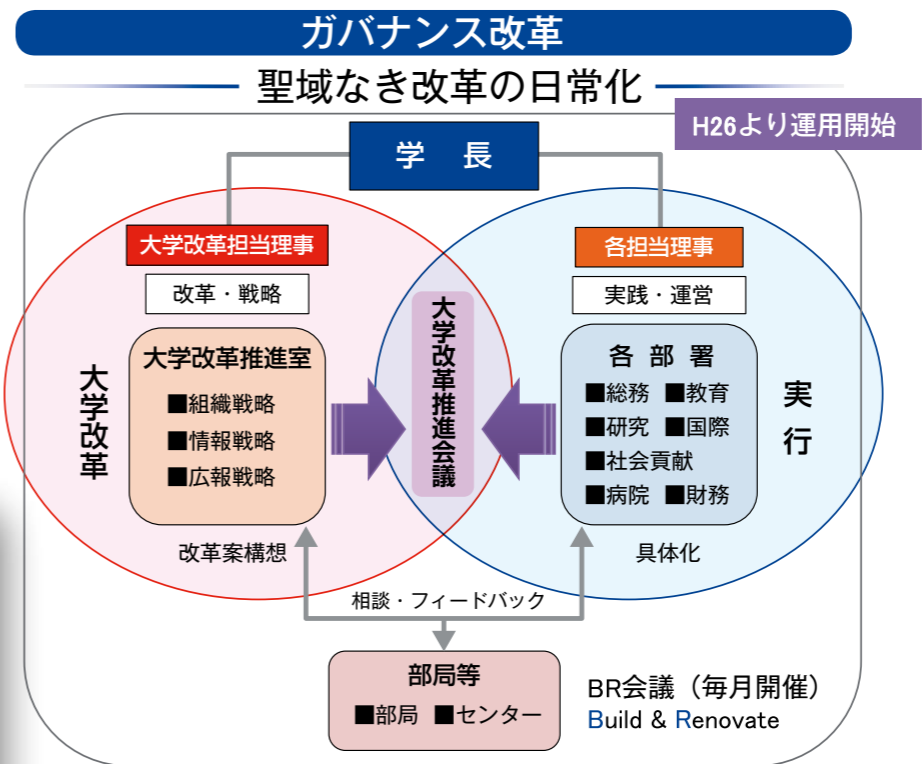
大学の要である経営においては、森田学長が1期目にミドルアップ・ミドルダウンを掲げていたが、現状ではアップもダウンも弱く感じている。各者の姿勢が消極的であり、そこを刺激し主体的に動いてもらえるようにしたい。ただ、教員が議論するとしても知識伝授になりやすく、それが社会で本当に必要なのかといった見方に欠けることもある。研究部門のURA（リサーチ・アドミニストレーター）の拡充、教育を先導するUEA（エデュケーション・アドミニストレーター）、国際戦略のためのUGA（グローバル・アドミニストレーター）、広報戦略のためのUPR（パブリック・リレーション）、入試・キャリアを支援するUAA（アドミッション・アドミニストレーター）の導入によって学外からの視点を取り入れ、改革を加速する起動力になればと思っている。教職員配置数の見直しや年俸制拡大による優秀な人財登用を進め、理事の能力を高めるためのBD（ボード・デベロップメント）、教員の能力を高めるためのFD（ファカルティ・デベロップメント）、職員の資質を高めるためのSD（スタッフ・デベロップメント）によって適切な人財の育成・

に行うためにも、1教員あるいは1部署がやっていることを横展開し、組織としてのつながりを持たせなければ現実的に広がっていかない。真の国際化を図ることははじめ、教育、研究などにおいても部署間で横断的に取り組み、学外に岡山大学の強みを見せていくことが最優先だと考える。

研修システムの強化を図るなど、ガバナンス体制を刷新する。

教育においては国際部門との関連が強く、海外でも活躍できる国際力豊かな人財育成が求められる。われわれの教育を国内だけではなく国際的に示すことも必要であり、MPコースの拡大によるグローバル教養教育や、受け入れ留学生数の増員、全学60分授業実施による単位の実質化など、国際的な学修環境をつくりたい。研究においては、文部科学省の「研究大学強化促進事業」に採択されており、グローバル最先端異分野融合研究機構による重点的支援に期待するところが大きい。海外での技術移転活動の拡充などにより世界に卓越した研究を推進し、そこを經由して学生の留学支援につながればと思っている。

医療においては岡山大学病院が厚生労働省の「臨床研究中核病院」の拠点に認定され、医療分野で優れていることがすでに認められている。一昨年度、昨年度にわたって行われた文部科学省のミッション再定義の中で岡山大学の強みとして医工連携大学院・医療工学部の構想といたった異分野融合として医学部と工学部・農学部との融合が認められている。岡山大学の特色としている医療を軸に教育・研究組織を強化していきたい。



— 改革を進めていくにあたり重点課題が多々ある中、大学改革担当理事に課せられた役割と責務は非常に大きいが。

大学改革にはScrap&Buildではなく、Build & Renovateという発想が重要だと考えている。必要なものをつくり、改善・修復しながら変わっていくのが教育・研究機関であり、大学だ。だからこそ改革にスピードを求められても難しく、数年ですぐに結果が出るものでもないが、研究大学として、臨床研究中核病院として、そして世界に開かれたすぐれた教育大学として、10年後には国際競争力を備えた存在感のある岡山大学を創造することがわれわれ執行部の大きな役割だと考えている。

Interviewer



副編集長 三浦 健志 (環境理工学部教授)
いちよう並木編集長 高橋 正徳 (法学部准教授)



朝日新聞社 編集委員 ◆ 岡山大学法学部卒

吉岡 桂子

Y O S H I O K A Ke i k o

「現場から人々の声を伝えたい」
という思いで新聞記者に。
中国特派員の経験を生かし、
日本と中国の「かけ橋」になることをめざす。

- ▶ よしおか けいこ (49歳)
- 1964年(昭和39年) 岡山県玉野市生まれ
- 1987年(昭和62年) 岡山大学法学部卒
- 1987年(昭和62年) 山陽放送入社 アナウンサーに
- 1989年(昭和64年) 朝日新聞社入社 和歌山支局配属
- 1990年(平成2年) 大阪本社経済部配属
- 1995年(平成7年) 東京本社経済部配属
- 1999年(平成11年) 語学研修で北京・対外経済貿易大学へ
- 2003年(平成15年) 上海・北京にて中国特派員
- 2007年(平成20年) 米・戦略国際問題研究所(CSIS)客員研究員
- 2008年(平成21年) 東京本社経済部、国際報道部にてデスク
- 2010年(平成22年) 北京にて中国特派員
- 2013年(平成25年) 東京本社編集委員

「ゼミで感じた現場の声の力」
岡山大学では法学部を専攻しました。3年生になってゼミを選んだ際、好奇心が強く、どうしても一つに絞ることができず、結局2つ取りました。一つは憲法、もう一つは行政法です。

ゼミはとても自由な雰囲気です。自分の意見をなんでも言えました。「通説はこうでも、違う見方だってありうる」なんて、よく分かってもらえないのに言い放ったり。今となっては恥ずかしい限りですが先生や先輩は「ものおししない」と笑って受け止めてくださいました。仕事を始めてからも取材で緊張することはあっても、どんな相手でも興味を持って向き合えるのは、議論の楽しさを経験できたおかげだと感謝しています。

また、ゼミで出かけた現場の調査も貴重な体験でした。ダム建設をめぐり長年、賛成派と反対派に住民が分裂してしまったり町話を聞いたり、瀬戸大橋の建設で橋桁がかかる島の人たちにも聞き取り調査に出かけたり。教室のなかで行政の手続きや住民の権利を学ぶだけでは実感できなかった社会の姿が、人々の声を拾い上げることで少し分かったような気がしました。何より、生の声を聞くことが非常におもしろかったです。

そこで、就職活動では、メディアを第一志望しました。内定をいただいた山陽放送に入り、アナウンサーとしてテレビの音楽番組や

ラジオの情報番組を担当しました。そのうち原稿を読むよりもスタジオでしゃべるよりも、自分で取材をし、記事を書いて伝えたいという思いが強くなり、朝日新聞社への転職を決めました。

入社して和歌山支局で事件や選挙を取材した後、大阪と東京で経済記者を務めました。転機になったのは、会社から派遣されて北京の大学で1年間、語学研修を受けたことです。隣の大国、中国は日本にとって重要な取材対象だと考え、希望しました。その後、2003年から上海、北京で取材し、2013年まであわせて8年間、中国で生活しました。国家主席のロシアやフランスへの外遊に同行したり、格差に苦しむ農村を取材したり。反日デモの時は2005年、2012年の二回とも現場を走り回りました。

湖南省にある公害に苦しむ村の取材は印象深かった。工場からの汚染水で日本のイタイイタイ病に似た公害病が発生し、死者も出ていました。地元の人々が声をあげようとしても、公安に抑えつけられていました。「いつ誰に抹消されるか分からない」と、被害の記録や写真の複製を私に託してくれ



中国特派員時代の吉岡氏

た村人の顔は忘れられません。立場や意見が違っても、相手が何を考えているか理解しようとするのが大事だと思います。中国にももともと民主的で公平な社会に変えたいと努力している人たちはたくさんいます。そうした人々の取り組みや意見を日本の読者に紹介したいと官僚や銀行家、研究者や市民運動家、メディア関係者などをインタビューし、発信しています。特派員時代からの蓄積を『問答有用 中国改革派19人に聞く』(岩波書店)という本にまとめました。こうした報道を通じて、中国の多様性を知ってもらえたらうれしいです。

今後は、**中国と日本の橋渡し**を
現在も編集委員として、中国問題を中心に取材をしています。世界中の国々が、政治や経済で年々存在感を強める中国と、どう関係を築くか、試行錯誤しています。日中関係はまだまだ波が高い時代が続くでしょう。近いからこそ起きる摩擦もあります。学生の時に感じた、直接人に会い、対話をするこの楽しさと大切さが、今でも私の仕事の基本です。互いが冷静に向き合い、理解を深められる材料を、現場に飛び込んで伝えていきたいと思っています。

記事を通じて 日本と中国をつなぐ



■朝日新聞
所在地(東京本社): 東京都中央区築地 5-3-2
事業内容: 日刊新聞の発行ほか
職員数: 約4,700人
国内全都道府県と海外5総局28支局、計321の総局・支局を日々の取材拠点として、社会の変化を捉え、発信し続けている。

「高度な知の創成と的確な知の継承」一。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

NAKAMURA Eizo (59歳)

- ▶1955年 佐賀県東松浦郡玄海町生まれ
- ▶1986年 University of Toronto, Ph.D.
- ▶1986年 フランス・パリ第6、第7大学地球物理学研究所 研究員
- ▶1987年 岡山大学地球内部研究センター 助手
- ▶1995年 岡山大学固体地球研究センター 教授
- ▶2003年 岡山大学固体地球研究センター センター長
- ▶2014年 岡山大学地球物質科学研究センター センター長



中村栄三

地球物質科学研究センター長

◀鳥取県の三朝地区にある地球物質科学研究センター



あふれる遊び心
エアシャワーを抜けると、青や黄色のカラフルな壁、扉が目の前に現れた。地球物質科学研究センター内のクリーンルーム。スタッフらで「模様替え」した室内は、無機質な「研究施設」のイメージとは異なる。

最先端の分析機器には、イス、サル、キジのイラストがついたネームプレートが貼ってある。機器の一部に、岡山らしい愛称をつけており、論文でも「INU」「SARU」などと紹介している。「研究は楽しいもの。とにかく何でも楽しみたい」と中村センター長。小惑星探査機「はやぶさ」が持ち帰った小惑星「イトカワ」の微粒子から発見した多数の小さなクレーター（直径100〜200ナノメートル）には、形が大手ドーナツチェーンの人気商品に似ていたことから「ボンデリングクレーター」と名付けた。

マントルから宇宙まで 最先端の分析技術で謎を解明

世界トップレベルの物質分析技術を“武器”に、地球や宇宙の謎を解明し続ける岡山大学地球物質科学研究センター。そのトップを務める中村栄三センター長は、国際的にも高い評価を受けるさまざまな成果を挙げてきた。宇宙同様、大きな志を持ちながら、日々、研究にまい進している。



◀中村センター長の研究成果が掲載されたJAXAのパンフレット

幅広い研究対象

研究成果は多岐にわたる。同センターの多様な分析機器を駆使して、鳥取県の大山（標高1729メートル）の「誕生」経緯を解き明かしたり、ロシアに落下した隕石の太陽系での変遷を突き止めるなどしてきた。

「面白いと感じたら、何でも取り組む」と話すように、研究対象は地下数100キロメートルのマントルから宇宙まで幅広い。今年4月には宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所の客員教授に就任。イトカワの微粒子や本年度中の打ち上げを目指す「はやぶさ2」が持ち帰るであろう小惑星試料の分析態勢を指導する。

地学への目覚め

「正直言うと、勉強は全くしていなかった」と、自身の中学・高校時代を振り返る。幼少期は山や川や海、自然の中で過ごすことが好きだった。地学の勉強を本格的に始めたのは、大学受験の時。「一番薄い教科書だったから」とその理由を明かす。

大学入学後はマグマに興味を持ち、研究に没頭することにな

る。「幼いころ遊んでいた場所は、マグマによって形成された地形。そのことは何となく知っていたが、物質科学的に掘り下げたいと思うようになった。自身も知らぬ間に、身近な古里の自然が、将来歩むべき道をともしてくれたのかもしれない。

技術の伝承

学生に世界をリードする物質科学研究を肌で感じてもらうようと、「国際インターンシッププログラム」を毎年実施。例年、世界中から70〜80人の応募があり、約10人を受け入れている。「研究者は自己完結で終わってはいけない。得た知識や経験を次の世代につないでいくことで、学問は発展する」と言うように、技術（Digital）の伝承を大切にしている。「自分たちにしかできないユニークな学問を追究して成果を挙げる。そうすれば、ここで学びたいという人が集まり、果立った人間はここを誇りに思うだろう。」

宇宙は急激に膨張するインフレーションによって始まり無限に広がっている。

「田舎の小さなセンターだが、インフレーションを起こすような、発信の起点でありたい」。そう考えている。

ソーシャル・ラーニング・スペース /言語カフェ:L-café



「L-café」は岡大生であればいつでも自由に訪問し、気軽に留学生と英語や日本語で会話をしたり、宿題をしたりと自由に過ごせる場を提供している。また、留学生による「英会話クラス」や、留学経験のある日本人学生による「TOEFL対策」、言語教育センターの教員による「学習・留学相談」などを行っている。その他、英語だけでなく、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語、日本語のクラスカフェも開講。加えて、気軽に参加できる場として、会話を楽しめるフリートークや、参加自由の様々なイベントやワークショップが開催されていて、一日に150人以上の学生が「L-café」を利用している。

留学生と日本人学生が交流しながら様々な言語や文化を学ぶ場（ソーシャル・ラーニング・スペース）として、2013年5月、津島地区にオープン。

学生の英語学習をサポートする「スチューデント・ティーチャー」

岡山大学津島地区にある留学生と日本人学生の学びの場「L-café」。セルビア共和国出身の留学生ベトラ・プリビチェビッチさん（文学部特別聴講学生）は、「英語を学びたい」「留学したい」という学生に英語を教える「スチューデント・ティーチャー」として活動している。スチューデント・ティーチャーを始めたのは2013年11月。日本にやって来た直後だった。将来、学校の先生になることを目標にしており、「活動を通して、良い経験になるのでは」と考えたそう。

活動当初は、日本人学生にはシャイな印象があった。慣れないうちは、自分ばかり話してしまうことも多かったが、それでも回数を重ねる

教師の夢に向かって一歩前進

「スチューデント・ティーチャー」には、面白い本がいっぱいあります。「L-café」内にある本棚には、様々な種類の本、雑誌がぎっしりと並んでいる。これらの本を使って会話をしたり、ゲームをするなどして、楽しみながら交流を深めているという。普段は先生役のベトラさんだが、学生から教えられることも多いや、新しく発見することも多いという。最近では、日本のロックバンドについて教えてもらったり、日本語の宿題を手伝ってもらうなどした。「L-café」での活動や何気ない日常も、彼女にとっては毎日が、日本についての学びの日々であるようだ。「お互いに教え合ったりして、交流することが楽しい」。L-caféで様々な人との出会いを重ねるベトラさんは、充実した笑顔で語ってくれた。



▲ベオグラードの風景



セルビア共和国
面積…77,474平方キロメートル（北海道とほぼ同じ大きさ）
人口…712万人（2011年国勢調査による）
首都…ベオグラード

当時13歳だったベトラさんは、翌年には日本語が学べる学校に進学。その後も勉強を続け、「もっと日本語の勉強を進めたい」と留学を決めた。「岡山大学のキャンパスは、自然が豊かでうれしい」とベトラさん。岡山の気候の良さも、留学先の決め手となった。大学では、日本語や歴史・文化などについて学んでいる。



▲大阪城にて

スチューデント・ティーチャーを続ける中で、楽しみがある。教えている学生の成績が良くなった、英語で出来ることが増えたりすることだ。「学生が何かを達成してくれることが嬉しい」と、やりがいを感じている。「L-café」には、面白い本がいっぱいあります。「L-café」内にある本棚には、様々な種類の本、雑誌がぎっしりと並んでいる。これらの本を使って会話をしたり、ゲームをするなどして、楽しみながら交流を深めているという。

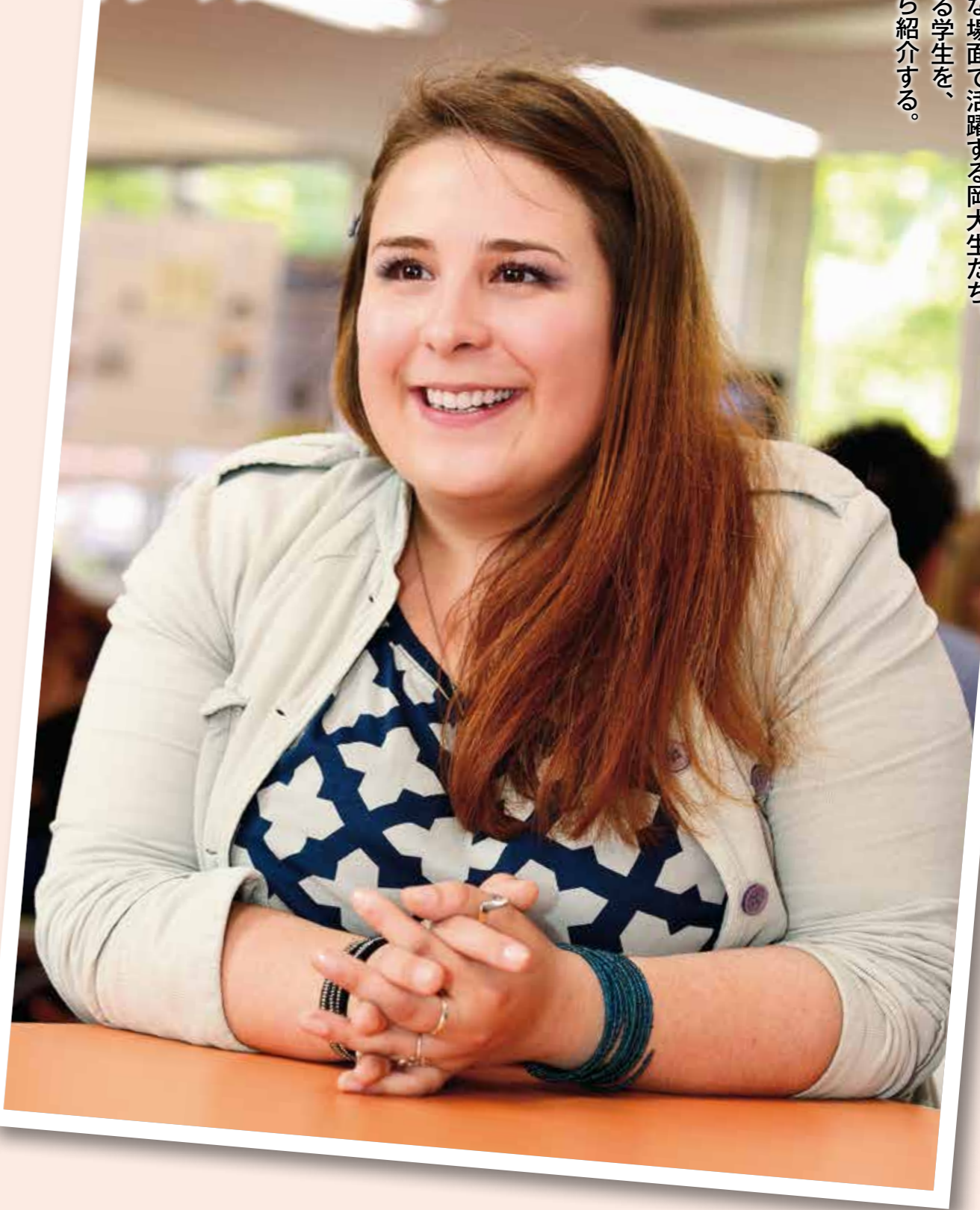


インタビュー
岡大学生取材班
法学部法学科3年
柿林 侑里

Petra Pribičević

文学部特別聴講学生

ペトラ・プリビチェビッチ



研究、スポーツ、趣味、特技…学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。そんなきらりと光る学生を、同じ学生の目線から紹介する。

岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

3 March

14日 卒業生フオロアップセミナー @東京を東京サテライトオフィスで開催

18日 大学院自然科学研究科博士後期課程の山口大介さんと博士前期課程の重廣司さんが平成25年度仁科賞を受賞

18日 定例記者発表を開催

18日 平成25年度学生文化奨励賞・学生スポーツ賞授与式を挙行し、個人の部97人・団体の部13団体が受賞

18日 本校や地元企業などが開発した医療機器を紹介する展示会岡山メテikalインノベーションを開催

19日 第3回岡山大学知財フォーラム2013を開催

19日 岡山大学サイエンストークを開催

19日 大学と連携して受動喫煙防止対策に取り組んだ岡山大生協学生委員会CCC「健康Project team」に感謝状を贈呈

20日 後期日程試験の合格者を発表

20日 学会等が制定する賞を受賞した学生を顕彰する平成25年度「学会賞等受賞者表彰式」を挙行し、学生14人を表彰

25日 平成25年度学位記授与式を挙行
平成25年度学位記授与式を桃太郎アリーナで行い、学部生大学院生ら3千200人が新たな一歩を踏み出した。



25日 交流広場オープンセレモニーを開催
「美しい学都」の実現に向け、キャンパス整備計画の一環で環境整備が進んでいた大学会館周辺で交流広場が完成したことを記念し、交流広場オープンセレモニーを開催。
大学会館北側に整備された交流広場は、ピンク色のレンガを敷き詰めた開放的な空間。世界的な建築家ユニット「SANAA」が設計したパーゴラ(日陰をつくりくつろぎの場を創造する屋根)が印象的で、周囲に植えられた樹木が生長すると木陰とパーゴラの陰が重なり合いつて森のような空間を創出。



4 April

26日 「自立若手教員による異分野融合領域の創出」事業が平成25年度事後評価で最高評価Sを獲得したことを顕彰し、異分野融合先端研究コアの穴戸昌彦教授(特任)と宇根山健治元教授(特任)を学長表彰

1日 全学の敷地内で全面禁煙を開始

8日 平成26年度岡山大学・大学院入学式を開催
岡山大学大学院の入学式が桃太郎アリーナで開かれ、学部大学院生ら3千459人が入学した。



9日 本学とベトナム工科大学の修士課程共同プログラム「岡山大学・工科大学特別コース」第6期生の留学生8人が、来日後の奨学金支援を行う「里親企業と対面

15日 平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の受賞者が決まり、科学技術賞(研究部門)に大学院医歯薬学総合研究科の森山芳則教授と表弘志准教授、若手科学者賞に大学院自然科学研究科の石川篤助教が受賞



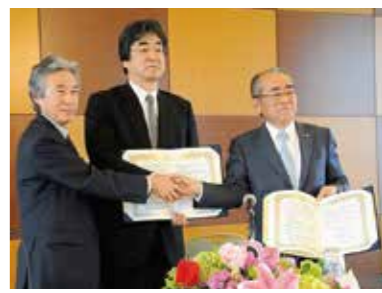
18日 マレーシアアプトラ大学と大学間協定を締結



22日 定例記者発表を開催

4 April

24日 岡山経済同友会と研究振興や人材育成を目的とした連携協力に関する協定を締結



25日 第42回岡大サイエンスカフェを開催

5 May

7日 コカコーラウエストからスポーツ教育支援金を寄贈される

9日 附属図書館がリニューアルオープン
外観・内装を一新しグループで話し合いながら学習できるスペース「ラーニングコモンズ」を新たに設置。
津島地区の中央図書館は、時計塔両翼の南面をガラス張りにする事で開放的な雰囲気になりラーニングコモンズでは、グループの人数や学習形態に合わせて、机の配置を変更して学習することが可能。海外衛星放送が視聴できる語学学習ブース、グループ学習室、セミナー室なども設置。

鹿田分館には、ラーニングコモンズ、セミナー室、個人学習用の閲覧室などを設置し、カフェ「ONKAVA COFFEE」も併設。



12日 廃棄物マネジメント研究センターなどはリユース瓶入りほろ茶「晴る茶」を岡山大学生協で販売開始



13日 岡山大学ダンス部が岡山県の「岡山芸術文化賞」準グランプリを受賞

22日 定例記者発表を開催

研究・臨床成果

■大学院自然科学研究科の矢ヶ崎琢磨特任助教、松本正和准教授、田中秀樹教授および名古屋大学の研究チームは、スーパーコンピュータ「京」を用いたシミュレーションにより、メタンハイドレートが分解しメタンが分離するメカニズムを世界で初めて解明した。アメリカ化学会の国際科学雑誌「Journal of Physical Chemistry B」に掲載。(3月・臨時発表)

■大学院自然科学研究科の呉景龍教授と中国医科大学との共同研究グループは、世界で初めて触覚注意に関する人間の脳内メカニズムをモデルで解明することに成功した。イギリスの神経科学雑誌「NeuroReport」に掲載。(3月・臨時発表)

■大学院医歯薬学総合研究科の窪木拓男教授らの研究グループは、代表的な炎症性サイトカインの一つである「IL-1 β 」の一時的刺激が、歯髄細胞の未分化性獲得と維持に関与することを初めて明らかにした。「Stem Cell Research & Therapy」に掲載。(3月・定例発表)

■大学院環境生命科学研究科の奥田潔教授らの研究グループは、正常な黄体細胞がリンパ管を通じて卵巣外へ流出することによって黄体が卵巣から消失することを発見した。オンライン科学誌「PLOS ONE」に掲載。(3月・定例発表)

■大学院環境生命科学研究科の清田洋正教授らの研究グループは、新しいインフルエンザ治療薬の候補物質を発見した。タミフル耐性ウイルスの酵素にも効果的なことから、タミフルに代わりうる新しいインフルエンザ薬への展開が期待される。英科学誌「Nature Communications」に掲載。(3月・定例発表)

■大学院自然科学研究科の山本泰教授らの研究グループは、植物が光合成を行っている葉緑体に過剰な光が照射されたとき、葉緑体チラコイド膜の上で光合成関連タンパク質が移動し凝集すること、また膜が本来もっている積み重なり構造がゆるむことを世界で初めて明らかにした。日本植物生理学会の英文雑誌「Plant and Cell Physiology」に掲載。(3月・臨時発表)

■地球物質科学研究センターの米田明准教授、兵庫県立大学、理化学研究所、高輝度光科学研究センターの研究グループは、大型放射光施設Spring-8のBL35XUのX線非弾性散乱装置を用いて、地球マントル最深部に存在する物質「Cmcn-CaTiO $_3$ 」の結晶弾性測定に成功した。英国の科学誌「Nature Communications」に掲載。(3月・臨時発表)

■岡山大学病院の稲垣正俊講師らの研究グループは、自殺に関するインターネットの利用が、自殺の危険性を高めることを見いだした。オンライン科学誌「PLOS ONE」に掲載。(4月・臨時発表)

■異分野融合先端研究コアの金原正幸助教、物質・材料研究機構らの研究チームは、大気下室温での完全印刷プロセスによって、有機薄膜トランジスタを形成するプロセスを確立した。「Advanced Functional Materials」に掲載。(5月・臨時発表)

■大学院自然科学研究科の小林達生教授と東京大学の研究チームは、最大193テラという極限的な強磁場において、固体酸素の新しい相を発見した。「Physical Review Letters」に掲載。(5月・臨時発表)

■大学院自然科学研究科の岡本秀毅准教授、江口律子助教、久保園芳博教授らの研究グループは、有機薄膜トランジスタとして世界最高レベルの電界効果移動度を示すトランジスタデバイスを実現した。「Scientific Reports」に掲載。(5月・定例発表)

編集後記

Postscript by the Editor

この度、広報アドバイザーとして、「いちよう並木」の編集のお手伝いをするようになりました。本来であれば任期は2年ですが、前任の原田和生先生（前副編集長）が部局の事情で1年で交代されることになり、残りの1年間、私が後任を務めることになりました。

広報アドバイザーに就任するや、任期2年目には編集長を務めるとのルールに従って、いきなり編集長を仰せつかり、その初仕事となったのが、後藤邦彰前編集長や企画・広報課のスタッフの方々のサポートをいただきながら三浦先生（副編集長）とともに行った今回のインタビュ（今号の特集企画）でした。

国立大学改革が急速に進行しつつある現在、岡山大学のいま、そしてこれからについてわかりやすく情報発信する広報誌の役割はますます大きくなると思います。今回の特集の続編も含めて、今後とも、微力ながら、魅力的な誌面作りのお手伝いができるばと思っております。よろしくお願いたします。

法学部准教授 ● 高橋 正徳

この度「いちよう並木」の副編集長をお引き受けしました環境生命科学研究科の三浦です。

岡山大学には昭和54年（1979年）に農学部が助手として赴任し、その後、環境理工学部に移りました。岡山大学に来て35年が経ちましたが、同じ大学に居ても、しかも長く居てもはじめて見聞きすることが非常に多いです。

先日、今回の特集のため、学長の森田先生、副学長の谷口先生に、大学改革についてインタビュを行いました。いつもは学部長、研究科長を通して聞いていることを直接聞く機会が持てました。同じ内容のことでも直接会うと印象が異なるということもありました。

「いちよう並木」ではその辺りのことも含めて伝えられれば、また手に取っていただき易い紙面になればと思っております。2年間、お世話になりますが、よろしくお願いたします。

環境理工学部教授 ● 三浦 健志

岡山大学生協同組合



岡山大学生協では、鹿田キャンパスの発掘調査で出土した絵馬を復元した「オリジナル絵馬」を販売しています。図柄は猿が馬を引く「猿駒曳（さるこまひき）」と「牛」の2種類。学生だけでなく、考古ファンや受験生の家族がいる地域住民など、学外からの人気も集めています。

オリジナル絵馬は実物の3分の1サイズで、縦5.5センチ、横8センチ。「猿駒曳」は大型（縦9センチ、横14センチ）もあります。1枚324円（大型は1,296円）。津島キャンパス（ビーチユニオンショップ）、鹿田キャンパス（コジカシヨップ）で販売しています。津島キャンパスのビーチユニオン前では、絵馬がくりつけられる木があり、「岡山大学合格」など、さまざまな願いが結んであります。

「最古の絵馬」のパワーを信じるか、信じないかは、あなた次第!!

最古の絵馬 にあやかろう! 学内外で人気

●絵馬は2013年4月の発掘調査で、鹿田遺跡にある奈良時代（8世紀後半）の井戸跡から2枚重なった状態で見つかりました。どちらも例としては国内最古です。「猿駒曳」は鞍などの馬具を装着した馬と手綱を持つ猿が描かれており、「牛」は頭や胴部に帯や布飾りの痕跡がみられます。

広告